



Title	「Abdullah伝」の研究：西洋人に対するAbdullahの批判
Author(s)	森村， 蕃
Citation	大阪外国語大学学報. 1973, 29, p. 351-360
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80486
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「Abdullah 伝」の研究

——西洋人に対する Abdullah の批判——

森 村 著

Keritek Abdullah mengenai Orang Eropah

Shigeru Morimura

Abdullah bin Abdul Kadir Munshi (1796—1854), pembaharu kesusasteraan Melayu, bergaul-gaul dengan banyak orang Eropah, ia-itu orang-orang Inggeris, Amerika, Perancis dan Jerman. Ada-kah dia memuji-muji sahaja orang Eropah ? Ada-kah dia berpehak kapada orang Eropah ? Ada-kah dia menggunakan chara yang sangat lunak, walau pun mensifatkan keburukan orang Eropah dalam karangan-karangan-nya ? Hingga kini agak-nya tiada pendirian tetap mengenai pandangan Abdullah terhadap orang Eropah.

Kenyataan yang harus kita akui ia-lah bahawa pedas juga kechaman-nya kapada orang Eropah, seperti juga kapada orang Melayu. Kechaman-nya kapada orang Eropah ada-lah mengenai sifat atau kelakuan orang Eropah dan pelajaran bahasa Melayu yang di-ikuti orang Eropah. Sifat atau kelakuan yang baik di-puji²-nya dan di-nasehatkan-nya supaya di-jadikan turut-turutan. Akan tetapi sifat atau kelakuan yang burok di-chela²-nya dan di-hinakan-nya. Dalam hal ini pun dia berlaku sabagai penasehat. Dia memuliakan segala bahasa, memang bahasa Melayu. Dia mempunyai keperchayaan dan keyakinan-nya yang kokoh tentang bahasa Melayu. Akan tetapi dia mengakui diri-nya sabagai orang yang penoh dengan chachat dan kekurangan ilmu pengetahuan, dan sama sa-kali tidak membesarkan diri. Apa yang harus saya peringati ia-lah bahawa dia tidak memandang bangsa. Dia mengasehi segala bangsa. Hal baik di-puji²-nya dan di-muliakan-nya, akan tetapi hal burok di-benchi-nya dan di-hinakan-nya sa-chara habis-habisan. Sifat-nya boleh di-katakan tulus ikhlas dan saleh. Dia beribadat, ta'at dan patoh kapada ugama-nya. Keritek-nya yang tajam itu berdasarkan kesadaran jiwa-nya, yang di-sebabkan kerana pendidekan keras yang di-terima-nya sejak kecil dan lagi kerana pergaulan hidup-nya dengan orang Eropah.

は じ め に

Abdullah bin Abdul Kadir Munshi (1796~1854——以下 Abdullah とのみ称す) によって、形態的にも内容的にもそれまでのマレー文学に於ける古い伝統が打破られ、マレー文学に所謂刷新が始めてもたらされた。彼は多数の西洋人と交際し、西洋人から西洋の知識・学問を見聞し、広く西洋文化に接触することが出来た。その結果、彼の精神のみならず、彼の考え方や表現方法も、その受けた影響は大きい。彼が交際した西洋人は、大多数、英語を母国語とする国民、即ち英国人と米国人で、その他フランス人や Rev. C. H. Thomsen のように英語を話すドイツ人もいた。Lord Minto, Raffles, Crawford, Butterworth, Farquhar, Newbold, Fryer のようなイギリス政庁の為政者・政府高官もいたし、Milne, Humphrey, Kidd, John Stronach などの英国人宣教師や Tracy, North, Benjamin Peach Keasberry のような米国人宣教師もいた。また John Morgan, Maxwell, Boustead, Benjamin Butler, Read, Sykes, Patton, Arthington, Watt, Forbes, Rogers, Martin その他多数の英国人商人や、英国人航海長、英国人医師、米国人医師もいた。西洋人の婦人、子供たちにもマレー語を教えた。Abdullah は西洋人に対して、主としてマレー語を教えたり、マレーに関する諸知識を提供した。また時には通訳や書記となったり、また時には西洋人に代って手形や書簡を書いたり、西洋人が行う書籍の出版・改訂を援助したりした。西洋人は彼のマレー語と才幹を高く評価した。周知の通り、彼は自己の作品の中でマレー人、特にマレーの諸侯とその子孫の行動や性格、それにマレー人社会の慣習・制度を厳しく批判し、忠言をする。彼はマレー人とマレー人社会の退歩を指摘し、進歩向上を望む。一方、西洋人に対する彼の見方や姿勢はどうであろうか。これに関して西洋人に対する Abdullah の見方や姿勢は、従来、極めて曖昧に受取られてきた。彼はマレー人より西洋人の方を賛美したかのように受取られたり、或るいは西洋人、特に英国人のよくない点を作品の中で描出しているも、西洋人との近密な生活の為、穏やかな方法で描出していると受取られたりしている。所謂彼は西洋人を好み、西洋人の側に与したかのように一面的に受取られ、そこには曖昧な点が多分に残されている。本稿の目的は、西洋人に対する彼の批判を考察し、西洋人に対する彼の見方と姿勢を明らかにすることにある。

I

マレー人の場合と同様に、西洋人に対しても Abdullah は批判的であった。マレー人の、特にマレーの諸侯やその子孫の行動や性格について、またマレー人のマレー語に対する姿勢について彼は批判し忠言を述べると同じように、西洋人の行動や性格、それに西洋人のマレー語学習とマレー語に対する姿勢について批判し、進んで忠言や示唆を与えるものである。彼は西洋人に対し賛辞を与えるだけではない。時には西洋人の醜態を明らかにし、非難もおこなう。彼の所謂批判は、鋭い筆致の直接的な表現によるほか、マレー古来の Pantun や Bidal による繊細、且つ的確な婉曲表現が用いられる。ここに彼独特の手法があって、巧緻さが滲み出ている。

先ず西洋人に対する彼の賛辞を見よう。彼は進んだ学問と文化を創造せんとする西洋人の活動性と勤勉さに対して賛辞を送るほか、数人の西洋人の立派な人格について賛辞を送る。有名な Raffles のもとでは、Abdullah は彼の要請により書記として勤めた。Abdullah は彼にマレー語を教え、マレーに関する知識についても多く提供した。Raffles に対する賛辞は、「学究的」「賢明・博学、その結果、尊厳と偉大なる名声を得ている」「思慮深い」「懇懇さと誠意ある立派な人格」とある。彼は Raffles 夫人にも同様に「賢明」「思慮深い人」と賛辞を送る。そして Raffles 夫妻の意気投合を“saperti raja dengan menteri” “saperti chinchin dengan permata” “saperti susu dengan sakar”⁽¹⁾ という Bidal での的確に喩える。そして後世の人々に模範とすべきものと忠言を述べ、Raffles 夫妻の行動と性格を有名な Pantun で誉め称える。Lord Minto に対する賛辞は「鄭重・懇懇」「情深さ」「人々を魅する立派な人格」とある。当時の大抵の高官に見られた高慢さは、彼には見られなかったという。シンガポールの二代目の raja になった Farquhar に対しては、「公正」で「情愛」があって、父のように慕われた立派な raja であったとある。彼の公正さは、次のように神に対する畏敬の念を以って称えられる。「高官は人々から賄賂を得て金持になったが、やがて地獄の火の燃え残りになった。神はそのような行為を立派な思慮あるすべての人々から遠ざけ、またこの浮世の財産に貪欲なことから遠ざけ、神は恒久の来世をこの浮世の尊さと変えるのだ。」⁽²⁾ また、東インド会社の仕事に従事しながら Abdullah にマレー語とマレーに関する知識を求めた Newbold に対しては、「賢明」「懇懇」「人をひく立派な人格」とある。Abdullah は Newbold との意気投合を“saperti raja dengan menteri” という Bidal で以って形容する。また、シンガポールの知事の役職についた Butterworth に対する賛辞は、「賢明・博学」「(人々の救済や善導に於いて、またワヤンの観覧や火災の消火にあたって、常に庶民と共にあり、彼が始めて当時、海賊によって虐待され苦しめられていた人々の悲嘆や涙に心を向けた。) 私は彼のような為政者を見たことがない。よい果実はやがて立派な木からとれるのだ。」⁽³⁾ 「シンガポールの人々は、立派ですべての住民の気持を満足させる為政者を持って、とても幸福であった。」⁽⁴⁾ であり、彼の立派な人格を「野にあって、葉がこんもりと茂り、花の芳香が漂う、やがて美味しい果実のなる木」に喩え、「或る人は日陰を求めてやって来る。また或る人は庇護と安楽の場所を得る為に祈りを求めるのだ。」⁽⁵⁾ と形容し、更に Pantun を詠んで誉め称える。Butterworth 夫人に対しても賛辞が送られ、Raffles 夫妻の場合と同様に、Butterworth 夫妻も“saperti susu dengan sakar” “saperti chinchin dengan permata” という Bidal で称賛される。また、英国人宣教師 Milne に対する賛辞は、「賢明」「善良」「親切」「沈着」「温厚」とある。Abdullah は Milne にマレー語を教えたが、始めて英語を Milne から習った。Milne との交際は日常諸般の私事に及ぶもので、Abdullah が知った Milne の人格を上述の言葉で称賛する。また、東インド会社の観測船 Kapal Eropah の航海長 Smith に対する賛辞は、「天文学や測量学に通じ、博学・賢明」「立派な人格」とある。彼の立派な人格を次の Bidal での的確に称える。“Jikalau asal-nya manikam itu, kalau jatuh ka-dalam limbahan sa-kali pun tiada akan hilang chahaya-nya.”⁽⁶⁾ Abdullah がこのように西洋人の立派な人格をあげて賛辞を与えるのは、これらの人々が知り、更に模範とすることを願うためであった。次のように彼は

言明する。「このような立派な行動、性格、知性、聰明さを人々が願わくば手本とし、模倣することが出来ればと思う。“Terutama mati dengan nama yang baik, daripada hidup dengan nama yang jahat ada-nya.”」⁽⁷⁾

また一方、Abdullah は西洋人の失態や短所、よくない行動や性格、醜態をも明らかにする。Raffles の治世の時代、英国がオランダと交戦する以前、Raffles はジャワのバンタラム王国に Tengku Panglima Besar という称号を持つ Saiyid Zin というシアクの王子を使者として派遣したが、彼は Raffles の信義に背いた。Raffles は彼の背信行為を見抜いたが、とても自分の失態に後悔したという。Abdullah は Raffles の後悔に関し、「Raffles は、大事を行うのに Tengku Panglima Besar の信用調査を怠った為に後悔した。」⁽⁸⁾ と鋭い筆致で批判し、人の信義について「その人の信用調査を怠れば、Tuan Raffles の後悔のように、後日、後悔することになる。」⁽⁹⁾ と人々に忠言をする。彼の忠言は更に次の Bidal で修飾される。“Sesal dahulu pendapatan, sesal kemudian tiada berguna.” “Sebab nila sa-titek rosak susu sa-belangga.” Raffles に対しては賛辞のみが与えられているのではない。更に、シンガポールの三代目の raja となった Crawford に対しては、Abdullah はかなり批判的である。Crawford について次のように批判する。「……彼には忍耐がなく、すぐに怒った。更に彼のどの行為も悠長なものであった。……彼は大志を抱き、賢明で博学であったが、富を求めようとした。……彼は威張った。更に彼の性格は、人々の冗長な訴えを聞くことを望まなかったし、また人の事情調査を望まなかった。彼は簡略な言葉を好み、途中で言葉をきった。マレー人とマレー諸島の民族は、冗長な言葉が好きであり、言葉の反復を好む。その為、私は大抵のマレー人や中国人が不平をこぼすのを聞いた。彼等は法を進んで受入れたのではなく、強制されるように受取ったようだ。」⁽¹⁰⁾ 「Tuan Farquhar が帰国の旅に出た後から Tuan Crawford がシンガポールを治めたが、シンガポールに raja がいてもいないかのようで、次のように Pantun の中に詠まれるようなものであった。“Sa-puloh bintang bertabor, boleh-kah sama dengan bulan yang satu?” 当時のシンガポールの有様は、頭髮が縫れ、汚顔をしていて、悲しんで坐っているとあったところの自分の夫を亡くした女性のようにであった。賢明で、視野が広い、思慮深い人々は、私が述べている喩えをはっきりおわかりいただける。この私と同じ事情の人々は、誰がいようといまいと自分達には同じで、釜の中に御飯があれば、また満腹であればそれで足りるもので、次のような Bidal による表現のようだ。“Sa-puloh kapal datang pun, anjing berchawat ekor juga.” 誰が行っても、raja の誰が来ても、私は何に構おうかという意味である。このような考え方で自己の生活を送った。つまり私は次のように喩えて言う。果実のない一本の木に喩えるのだ。それは切倒され、割られて薪にされる以外は人間に対して何の役に立つのか。」⁽¹¹⁾ 更に Abdullah の厳しい批判は Mr. Bean に対するものである。Mr. Bean は、Farquhar がマラッカの raja になって間もなく Supai (インド英国軍隊の土着人兵) の隊長になった。Abdullah は、彼は非常に悪戯好みで、無慈悲であったと非難する。Mr. Bean は、先ず最初、道を通るどの民族の子供達も捕えて垣の中へ入れさせ、そこで拳闘をさせた。逃げるのが早い子供には、二匹の犬に追わせて捕えさせた。拳闘を望まない子供は簾で打つよう命じられた。Mr. Bean は笑っては小躍りして喜んだという。

拳闘をした子供は顔や鼻が腫れる者がいたが、彼は血を流した者を見ると、その者により多くのお金を与え、血を流さない者には少量のお金を与えて解放した。人間の血が流れるのを見ることが彼の毎日の仕事であった。遂に Mr Bean は子供達に飽きて、老人や貧乏人に拳闘をさせたという。数カ月して、彼は今度は人と闘鶏をした。一日に何十匹もの鶏が死んだという。また暫くたって、彼は何十匹もの家鴨を買い、自分の家の前の海に放した。彼は2～3匹のとても荒々しい彼の犬にそれらの家鴨を捕えさせた。これが彼の楽しみであり、犬が捕えることが出来なかった家鴨は、彼は自分の銃でうち殺した。家鴨の半数は犬に引裂かれ、また半数は弾丸の餌食となったが、彼は小躍りして喜んだという。更に暫くして、今度は彼は青鳩を買い求め、部下が一匹ずつ放すと銃でうった。後にはまた彼は数匹の猿を買い、家の前の紫檀の上に放して同様にうち殺した。更に彼は多額の金を浪費した。彼が住んでいる間は、女性は暴行をされるのを恐れて敢えて路地を歩かなかったという。更に Abdullah は次のように当時 (Farquhar がマラッカを治めた頃) の英国人の醜態を明らかにする。『当時、マラッカでは英国人は未だ多くいなかった。英国人は悪戯で荒々しかった為に、人は彼等を虎を見るように眺めた。もしマラッカに英国船が寄港すれば、人は皆、家の戸を閉めた。路地の周囲で数人の船乗りが酔い、人の家の戸を毀す者もいたし、歩いている女性を追いかける者もあれば、お互いに喧嘩をして顔を切る者もいて、大騒ぎとなった。人は追われて逃げ、市場の品物は奪われた。また、酔っている為、川の中へ転落して死亡した者も若干いた。すべての人々は恐怖心を懷いた。当時、私は素面の英国人に会ったことがなく、すべて酔っていた。泣く子供に母親は「静かに！酔った英国人が来るよ。」と言え、その子供は恐れて黙った。人々はどこで英国人と出会っても、遠くへ逃げた。海上に英国船が見えると、女性は一人も敢えて路地を歩かなかった。高貴な人々も、召使も、姿をみせなかった。というのは彼等によって暴行されたからだ。高官 (Mr. Bean) の行為に対する恐怖心に加えて、人々の恐怖心は益々つのった。』⁽¹²⁾ 『Tuan Raja Farquhar がマラッカの当時の raja であったが、その高官 (Mr. Bean) の行為のすべてを構わなかったから、私は不思議に思った。』⁽¹³⁾ 前述のように Farquhar に対して Abdullah は賛辞を送るものであるが、この点だけは腑に落ちないことのようにであった。

Abdullah はオランダ人に対しても批判的であった。彼は「オランダ語を一言も話せなかった」⁽¹⁴⁾ 為に、オランダ人とは直接、交際はしなかったが、オランダ人の有様を次のように非難する。即ち、オランダの統治時代、マラッカ人は重税と虐待に悩まされたという。特に tukang pennyapu という仇名で Van Goor という書記と彼の四人の警察官によって、マラッカ人は罰金と脅迫の虐待を受けた。Van Goor は「人間の血を吸う蛭」と、また四人の警察官は「飛ぶ山蛭」と喩えている。Van Goor はやがて狂人になり、或る夜、二階から転落して不名誉の名前を残して死亡した。Abdullah は次のように忠言を述べる。「このことから理性ある人は教訓を得るべきである。明瞭なことは、神の報いは木や石や武器で打たれることによるものではなくて、不意なるものであり、善事を行う者は誰でも善の報いを受け、悪事を行う者は悪の報いを受けるものだ。』⁽¹⁵⁾

このように Abdullah は西洋人の失態、よくない行動や性格、醜態を明らかにする。そして、

よくない行動や性格は卑め、忠言をする。彼の忠言は、『善人の名はいついつまでも後世に「芳香を漂わすもの」⁽¹⁶⁾であり、悪人の名は「卑められ、悪臭を放つもの」⁽¹⁷⁾である。「人は死して名を残す」のであり、名こそ行末長く人々に語り伝えられる。従って、この世に於いて人間は如何にあるべきか』というのである。彼の人生観が如実に表明されているのであり、「実直」と「敬虔」に基くものであった。

II

Abdullah は西洋人に彼等の要請によってマレー語を教えた。西洋人のマレー語学習とマレー語に対する姿勢に関する彼の批判がある。言語に対する彼の強い信念に基くものであった。西洋人の中にマレー語を熱心に学び、知識を深めようとした者は、数人のみであったという。例えば英国人宣教師 Milne がそうであった。また、米国人宣教師 North は他の西洋人とはちがひ、マレー語文法、発音、Bidal など、マレー語を深く研究しようとした。North は更に Abdullah の手を借りて、熱心に西洋の学問をマレー語に翻訳しようとした。彼の鋭敏な理解力に Abdullah は驚嘆するほどであった。また Crawford がシンガポールを治めていた頃、英国商人 John Morgan の書記 Douglas は、マレー語に熱意を示した。16才数カ月という齡のこの青年は、3 カ月マレー語を学んだだけで読むこと、書くことができ、マレー語の英訳ができたという。彼はまもなく病死したが、Abdullah はマレー語に対する彼の熱意を認め、「もしこの若者が神に長寿を賜われれば、彼はマレー語をほとんど修得したことだろう。すべての若者は彼を模範とすべきだ。」⁽¹⁸⁾と忠言する。

しかし、大抵の西洋人は、マレー語を読むこと、書くこと、話すことが少々できる程度の、ただ外面的な知識を求めたという。中には上述の Douglas とは対照的に熱意のない、理解力不足の者がいて、名目上マレー語を学び、マレー語の使用が不可能に終わった者がいたという。彼は英国人宣教師 Hughes や Evans がそうであったことをあげる。中には Thomsen のように、マレー語文法を無視し、英文法に固執して、絶えず Abdullah の指導と対立した者がいた。Abdullah は Thomsen から印刷術を学び、長年、彼と交際したが、マレー語に関して Thomsen に対する彼の批判は厳しい。Thomsen は Milne とは対照的に Abdullah のマレー語の指導に忠実ではなく、自己の意見を通そうとした。「私は自分だけが賢明だと訴える人間の性格を知ったから驚いた。」⁽¹⁹⁾と Abdullah は非難する。Thomsen は Abdullah の手を借りて聖書をマレー語に翻訳したが、二人の間に絶えず口論が生じた。Thomsen は英文法を規範にしようとした。その結果、その翻訳版は、語の使用に於いても、文法の運用に於いても、マレー語でない個所が多いと Abdullah は例を以って示している。彼の批判は「私が欺かれたのは、その聖書を翻訳する時 Tuan Thomsen から強制された為で、マレー語文法でないものを使用するよう彼は命じた。」⁽²⁰⁾であり、「私は Tuan Thomsen の許可や命令によらなければ、どんなこともしたり、訂正を加えたりすることも出来なかったことを諸氏はよく判断して下さい。」⁽²¹⁾「諸氏は私が彼の教師であった為に私を非難して下さいな。」⁽²²⁾と訴える。Abdullah の懸念は、Thomsen

が最初示した聖書が翻訳版であった為に、また「Thomsen が異議を立て、更にマレー語の非常な理解の不足」⁽²³⁾の為に、人々がその聖書のマレー語翻訳版の内容を誤解するのではないかということであった。だが、次のように Abdullah は自己と自己の学問に謙虚な態度を示す。またマレー語に対する強い信念と熱意を持っていた。「私は、私自身が賢明であるとか、誤りを犯さないとかは、決して認めない。私は常に欠点で満ちているからだ。だが、神かけてマレー語文法であれば私は正誤を知り、それを区別することが出来る。というのは私自身の言語であるからだ。更に私はマレー語を研究したのだ。人からの聞覚えでもなく、模倣によるものでもないのだ。」⁽²⁴⁾ Abdullah は父方からアラブの血を、母方からタミールの血をひく混血であったが、自己をマレー人の側においている。彼はマレー語を「私自身の言語」と述べている。当時、マレー人は日常使用するマレー語を尊ばなかった。マレー語の教習所もなく、マレー語文法を体系づける者もいなかった。彼等のマレー語は聞覚えか模倣による程度のもので、彼等はマレー語を学ぼうとしなかったという。Abdullah は、この所謂マレー語を軽視するマレー人の慣習を非難し、言語の重要性を説く者である。彼は言語を愛し、言語に対し情熱を持つ者であった。ただマレー人に対してのみならず、このように西洋人に対しても、言語に対する情熱と強い信念をもって望む者であった。さて、後に英国人宣教師 Stronach の要請で Abdullah は Thomsen の聖書翻訳版を改訂する仕事を手伝ったが、この時も Stronach と米国人宣教師 North と Keasberry は、Abdullah にマレー人が普通使用しない語をいくつか訂正させなかったという。この為、彼は非難を更に受けることを懸念する。そして次の Bidal で彼等に非難する。“Pelandok lupakan jerat, tetapi jerat tiada melupakan pelandok ada-nya.”⁽²⁵⁾ Thomsen は、聖書の次にオランダ人がマレー語に翻訳した *Kesah Segala Rasul* をまた Abdullah の手を借りて改訂しようとした。この時も Thomsen はマレー語文法を無視し、常に英語か他の言語から指針をとった。二人の間で口論が再び生じ、その書も単語はマレー語であるが、マレー語文法に従っていないという。その後何度もシンガポールとマラッカで聖書と *Kesah Segala Rasul* は発刊され、それらを著わした者たちは独善的にマレー語文法なるものを創造し、それらの書は終始、誤りで満ちていると Abdullah は批評する。そして、彼等をマレー語を研究しなかった者か、マレー語を理解しない者と看做し、彼等が独善的な方法で言語に取り組む姿勢を憂慮する。Abdullah の批判は次のように厳しい。「彼等はマレー語を勉強しようと思わず、破壊しようとするのだと思う。私はその愚かな行為を知っている。彼等は新しい仕事をする事が出来ると人々に言ってもらえるように、自分達の仕事に他人に従ってもらえると、彼等は思っているのだ。しかし、後日、賢明な人々がそのような仕事を見た時、すぐにこれを自己の考えに従った教育のない愚かな人間の仕事だと知るといことを、彼等はわからない。」⁽²⁶⁾ そして次の Bidal で忠言する。“Jikalau tiada dapat di-baiki, tetapi jangan di-pechahkan.”⁽²⁷⁾ 更に Thomsen の聖書だけではなく、或るオランダ人による聖書翻訳版や、或る英国人による *Injil Yahya* にも（この場合、オランダ人と英国人の名前は明記されていない）、マレー語に誤りのあることを Abdullah は認め、例証している。彼の批判は、彼等は英文法を規範としたもので、人を笑わせ、玩具を作り、マレー語を知らないということを示したという。

また、西洋人たちは或る接辞を知ると、これがすべての語に対し普遍妥当性を持つと主張し、自由に語彙を創造したという。例えば接辞 ke-an に 関し keadaan が可能ならば, kebekuan, keperkiraan, kejalanan などはどうして不可能なのかと西洋人は主張した。接辞は則規通りいかぬ例外があるのに、西洋人がその普遍妥当性を主張することに対して、「白人諸氏はとても愚かになった」⁽³²⁾と彼は批判する。また、彼が不可解であったことは、マレー語を学ぶ者の大抵は少々読むことが出来ればマレー語を自国語に翻訳したことであつた。そこで、マレー語学習についての彼の忠言は、自国語をマレー語にマレー語の語法に従って翻訳してみることである。そして、この学習方法の有用性を「これはよい種子のように、どこに蒔かれても必ず発芽するもので、とても芳しい花が咲き、美味しい実を結ぶ」⁽³²⁾と喩え、「神がマレー語にこの状態を創造して下されんことを願う」⁽³²⁾と結ぶ。Abdullah の西洋人に対する更に厳しい批判は、マレー語を学ぶ大部分の西洋人がマレー語の習得は容易で他の言語ほど困難なものではないと考えたことに對するものである。「そのような見解は決して正しくない。彼等はマレー語の語法を未だ知らず、マレー語の林の中へ未だ入っていないからだ。」⁽³²⁾と批判する。大部分の西洋人は、少々読むこと、書くこと、話すことが出来る程度にマレー語を学び、深く学ぼうとしなかった。彼等は少々マレー語ができればマレー語は容易だと考えがちで、中には上述のように翻訳や改訂を行おうとした者がいたのである。彼はマレー語を林に喩える。「もしその中へ入れば茂みは深く、鋭い刺が叢の隙間に隠されているものとわかつた。歩くのが少し誤れば足に突刺さり、大手を振って歩くのが少し誤れば手に突刺さるのだ。」⁽³²⁾彼は、このようにマレー語は容易な言語であると決して思つてはいけないと戒める。彼はただマレー人に対してだけではなく、西洋人に対してもマレー語を輕視する姿勢を正そうとするものである。彼はマレー語を愛し、尊ぶ者であつた。西洋人に対しても、マレー語に自己の強い信念をもって望むものであつた。

お わ り に

Abdullah はただ西洋人に贅辞を送るだけではない。周知のように、マレー人に対する彼の批判は厳しい。これと同様に西洋人に対しても彼の批判は厳しいことを我々は認識しなければならない。彼は、マレー人に対する場合と同様に、西洋人に対しても時には bodoh, bebal etc. (「愚か」という意) といった辛辣な言葉で以つて批判を投げ、時にはマレー古来の Bidal による繊細、且つ的確な表現を用いて批判し、そして忠言をする。彼は、實際、父方からアラブの血を、母方からタミールの血をひく混血であつたが、「マレー語は自己の言語」「我々マレー人」という彼の言葉から明らかなように、彼は自身をマレー人一般庶民の中におく。しかし、人種的偏見のない、いずれの民族にも与することのない中立の立場で、東洋人にも西洋人にも批判の目を向ける。彼は西洋人の行動と性格を鋭く批判し、立派な行動と性格、人格は、人々がこれを知つて更に模範とすることを願い、よくない行動と性格は卑め忠言をする。所謂彼はただ西洋人を好み、西洋人に与するといった曖昧な従来の彼に対する見方は改められるべきである。彼はすべての民族を平等に愛し、あくまで善を崇め、惡を卑め嫌惡する。彼は非常に実直であつた。

また、彼はマレー語に関して Munshi（言語の教師）として自信と強い信念とを持っていた。ここに彼の偉大なところがあった。彼は言語を愛し尊ぶ姿勢を崩さない。しかし、自己の学問に対しても謙虚な態度を忘れない。神に帰依し、彼の思想には常に神に対する畏敬の念がある。彼は実直で、敬虔深い言語学者であり文学者であった。

Abdullah は7才の頃から厳しい教育の生活環境の中で、宗教教育と言語教育を受けた。幼少時より受けた宗教教育は、彼の性格形成に多大の影響を与え、神に対する畏敬の念を深める結果となった。彼は親の厳しい教育に時には反発し怨みを抱いたことがあったが、後には親の愛情と学問の有難さを身を以って知った。彼は幼少時からの教育と学問によって目覚めた。そして自らも進んで学問探求に精進した。西洋が東洋に足掛かりを築いていった目まぐるしい時代の最中であって、彼と西洋人との生活環境が更に彼をして覚醒させた。この覚醒が、彼に東洋人に対してのみならず、西洋人に対しても鋭い批判力の芽を養っていったのである。このことに関しては、紙面の都合上、別の機会に更に論述しなければならない。

註

- (1) Abdullah bin Abdul Kadir Munshi ; Hikayat Abdullah, Kuala Lumpur, 1966, Jilid Pertama p. 79 l. 8~l. 9
- (2) ibid. Jilid Kedua p. 246 l. 24~l. 30, p. 247 l. 1~l. 2
- (3) ibid. Jilid Kedua p. 415 l. 30~l. 32, p. 416 l. 1
- (4) ibid. Jilid Kedua p. 415 l. 2~l. 3
- (5) ibid. Jilid Kedua p. 423 l. 27~l. 30, p. 424 l. 1
- (6) ibid. Jilid Kedua p. 319 l. 6~l. 7
- (7) ibid. Jilid Kedua p. 250 l. 18~l. 26
- (8) ibid. Jilid Pertama p. 108 l. 28~l. 31
- (9) ibid. Jilid Pertama p. 108 l. 22~l. 25
- (10) ibid. Jilid Kedua p. 293 l. 27~l. 31, p. 294 l. 1~l. 13
- (11) ibid. Jilid Kedua p. 250 l. 27~l. 31, p. 251 l. 1~l. 21
- (12) ibid. Jilid Pertama p. 66 l. 19~l. 35, p. 67 l. 1~l. 12
- (13) ibid. Jilid Pertama p. 68 l. 13~l. 15
- (14) ibid. Jilid Pertama p. 156 l. 2~l. 3
- (15) ibid. Jilid Pertama p. 173 l. 1~l. 8
- (16) ibid. Jilid Kedua p. 429 l. 31~l. 32
- (17) ibid. Jilid Kedua p. 430 l. 3~l. 4
- (18) ibid. Jilid Kedua p. 297 l. 11~l. 18
- (19) ibid. Jilid Pertama p. 122 l. 31~l. 32
- (20) ibid. Jilid Kedua p. 408 l. 32, p. 409 l. 1~l. 2
- (21) ibid. Jilid Pertama p. 149 l. 19~l. 23

- (22) ibid. Jilid Pertama p. 149 l. 32~l. 34
- (23) ibid. Jilid Pertama p. 149 l. 11~l. 12
- (24) ibid. Jilid Pertama p. 149 l. 35~l. 36, p. 150 l. 1~l. 7
- (25) ibid. Jilid Kedua p. 409 l. 8~l. 9
- (26) ibid. Jilid Pertama P. 152 l. 6~l. 17
- (27) ibid. Jilid Pertama p. 152 l. 17~l. 18
- (28) ibid. Jilid Kedua p. 332 l. 9
- (29) ibid. Jilid Kedua p. 334 l. 12~l. 16
- (30) ibid. Jilid Kedua p. 334 l. 16~l. 19
- (31) ibid. Jilid Kedua p. 298 l. 14~l. 17
- (32) ibid. Jilid Kedua p. 298 l. 17~l. 22